

優秀賞

じいちゃん、あのね

小豆島町立安田小学校二年 中野 蒼樹

「じいちゃんは今、どこで何をしようかなあ？」

ぼくはときどきママにこうたずねる。すると、ママは、

「じいちゃんはいつも空からそうきやみんなのことを見よると思うよ。」と、答える。

ぼくはじいちゃんが大好きだった。お休みの日があると、じいちゃんの家にあそびに行く。いっしょに高松に行ったり、ボールで遊んだりもした。じいちゃんは、いつもにこにこえ顔でぼくの話聞いてくれた。

れいわ三年一月二十八日。じいちゃんは天国にたび立って行った。その日は、ぼくが安田小学校に入学してはじめてのなわとび大会の日だった。来て

くれるはずだったママは来ていなかった。かわりに来た。パパからじいちゃんになくなったことを聞いた。ぼくは、しんじられなかった。じいちゃんはびよう気で長い間、入いんしていたけど、また元気になってお家に帰ってくると思っていたからだ。

じいちゃんの入いん中は、新がたコロナウイルスたいさくのため、なかなかお見まいに行くことができなかった。だから、ママは毎日じいちゃんにでんわでお話をしてきた。ときどき、ぼくもじいちゃんとお話をした。でも、でんわの向こうのじいちゃんの声がかんだん聞こえにくくなってきた。そのうち、お話するのもしんどそうになっていた。

ひさしぶりにママがぼくをじいちゃんにびよういんにつれて行ってくれた。そして、ママはかんごしさんに、

「じいちゃんに会わせてください！」
「顔を見せてお話させてください！」

と、何回もおねがいをしていた。とくべつにじどうドアのガラスの外から会わせてくれた。じいちゃんは車いすにのってかんごしさんといっしょに来た。じいちゃんはぼくの顔を見たとき、泣き出した。

「そうき、そうき…」

と、ぼくの名前を何回もよんでいた。びよう気のせいで声も出なくなつたのに、じいちゃんはいっしょうけんめいぼくの名前をよんでくれた。ぼくとママも、いっしょうけんめいに、

「じいちゃん、びよう気にまけるな。がんばれ、がんばれ…」
と、何回も言った。

ぼくたちがじいちゃんに会ったつぎの日から、じいちゃんのびよう気はますますわるくなった。ベットからおき

あがることも、でんわで声を聞くこともできなくなっていた。

またじいちゃんと会えることになったので、ぼくはすぐにびょういんに行った。じいちゃんはともしんどそうだったけど、ぼくの顔を見ると、とってもうれしそうなのにこにこ顔のじいちゃんになった。そして、いっぱいお話をした。じいちゃんは、

「そうき、こつちにこい。」

と言って、ぼくをベッドのそばによんだ。

「そうき、べんきようがんばるんぞ。

そうきはかしこいから、ママやパパの言うこと聞いて、ママのことたすけるんやで。」

と、じいちゃんは言った。そして、ぼくが帰るときに、

「これで何でもすきなもの買えよ。」

と、おこづかいをくれた。だけど、じいちゃんの手はふるえていた。

じいちゃんがなくなつたのはその日から四日後のことだった。じいちゃんはママに手をにぎられ、ばあちゃんが待っている天国に行ったようだ。じい

ちゃんはたった一人で、よわねをはかず、びょう気とたたかかった。じいちゃんはやさしくて、とつても強いのだ。

夏休みのおぼんには、じいちゃんのみたましいがお家に帰ってくると聞いた。

「そうだ、おぼんにじいちゃんの家に行こう。そしたら、またお話できるかもしれない。」

じいちゃんの家で、ぼくはたくさんお話をした。

「じいちゃん、あのね。二年生になつてサッカーをはじめたよ。大きくなつたらサッカーせん手になるんだよ。」

「じいちゃん、あのね。じいちゃんに言われたとおり、パパとママの言うことをよく聞いて、お手伝いもいっぱいしてるんだよ。」

「じいちゃん、あのね。ぼくもじいちゃんみたいに、つらくてもよわ音をはかない、強くて、やさしい人になるからね。」

「じいちゃん、あのね。これからもずっと空からぼくやパパやママのことを見えてね。やくそくだよ。」

ぼくはぶつだんにかぎつてあるじいちゃんの顔を見た。じいちゃんが、
「そうき、えらいぞ。」
と、にこにこえ顔で、答えてくれた気がする。